The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈時間イマージュ〉と量子の「時間」 : 『シネマ・2』における第一、第二の〈時間イマージュ〉について
Author(s)	打田, 素之
Citation	Gallia. 2000, 39, p. 33-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3537
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜時間イマージュ＞と量子の「時間」
――『シネマ・2』における第一、第二の＜時間イマージュ＞について――

打田　素之

ドゥルーズは、1983年から1985年にかけて発表した膨大な映画論『シネマ・1』『シネマ・2』の中で、映画のイマージュが第二次世界大戦を境に、「運動 mouvement」から「時間　temps」へと転換したと述べている。彼によれば、戦前の映画のイマージュは身体の知覚運動過程をなぞるかのように構成されているが、戦後のイマージュは、ネオ・レアリスムを発端として、ヌーヴェル・ヴァーグの諸作に見られるように、もはやイマージュの間に「運動」を前提することはできないと言う。ドゥルーズは、こうしたイマージュを＜時間イマージュ(image-temps)＞と呼ぶのだが、運動の連鎖を欠いた映像が、どうして「時間」を直接提示することになるのか。＜時間イマージュ＞の「時間」とは、一体、何を意味するのか。拙論ではそれを明らかにしたい。

1．＜時間イマージュ＞と『シネマ』の時間論

では、具体的に＜時間イマージュ＞とは、どのような映像をいうのか。ドゥルーズは『シネマ・2』の中で、＜時間イマージュ＞を次の三つに分類している。

1．過去の諸層の共存（la coexistence des nappes de passé）
2．現在の先端の同時性（la simultanéité des pointes de présent）
3．時間のセリー（la série du temps）

そして、映画史の上で最初に＜時間イマージュ＞が現れたのは、オーソン・ウェルズの『市民ケーン』（1941年）だと言う。それはこの映画が過去という時間を独自の形式で提示したからであった。

> 過去一般がまずあること、過去のあらゆる層が共存していること、最も縮約されたレベルが存在すること、それが最初の偉大な時間映画のフィルムであるウェルズの『市民ケーン』に見出されるコンセプトである。(pp.130-131)[1]

『市民ケーン』はオーソン・ウェルズ演じる大富豪チャールズ・フォスター・ケーンが、「ローズ・バッド」という謎の言葉を残して死ぬところから始まる。物語はこの言葉の意味を巡って、生前のケーンを知る人物が次々とインタビューを

1）Gilles Deleuze, *Cinéma 2*, Minuit, 1985. 以下、ページ数だけを付した引用は全て本書から。

受け、彼らの回想が映像化されるという構成になっている。彼らの物語の一つ一つが、引用にある「過去の拡がり＝層 (nappes de passé)」に相当するのだが、それらが共存するのは「過去一般 (passé en général)」があるからだという。この関係を理解するためには、『シネマ』二巻を通して展開されるドゥルーズ-ベルクソンの独自の時間論を知らなければならない。そこでは、過去は過ぎ去るものではなく、常に存続するものだとされる。

> 現在それ自身は、無限に縮約された過去としてしか存在しない。そして、その縮約された過去は既にあるものの極点で形成される。こうした条件がなければ、現在が過ぎ去るということはないであろう。現在が過去というものの最も縮約されたレベルでなければ、現在は過ぎ去ることはない。実際、驚くべきことに、順番があるのは過去ではなく、過ぎ去って行く現在なのだ。反対に過去は多かれ少なかれ拡がりをもち、多少とも縮約された円環たちの共存として、自らの姿を表す。その円環のそれぞれは同時に全てを含み、現在はその円環たちの極限に位置している。(p.130)

つまり、現在が過ぎ去るのは、過去の存在あってのこと、現在が過ぎ去る限り、無数の過去が共存しており、その全体が過去一般だとされる。そして、それらの最も縮約された点が現在だというのだ。『市民ケーン』には、主人公の友人たちが語る複数の過去 (nappes de passé) があり、それらはケーンの全人生という過去一般が存続しているのだから、全て共存していることになる。しかし、複数の過去が順番に語られることが、どうして「時間を直接示す」(p.138) ことになるのか。回想形式を取ってさえいれば、全て＜時間イマージュ＞の映画と言えるのか。

2．第一の＜時間イマージュ＞

この問いに答えるためには、同じく＜時間イマージュ＞の映画作家とされるアラン・レネの映画に関する、次の一文を知らなければならない。

> 彼［レネ］は、二人の記憶、複数の記憶が持つ不合理を発見している。いろいろなレベルの過去は、もはや同一人物、同一家族、同一グループに回帰するのではなく、全く異なった複数の人物と、繋がりを欠いた場所を示唆する。それらが世界の記憶を構成しているのだ。レネは、相対性一般に到達し、ウェルズにおいては方向性でしかなかったものの極限へと進む。すなわち、それは過去の諸層の間に、決定不能の選択肢を用意すること。
>
> (p.153、下線、［　］は筆者)

レネの映画が＜時間イマージュ＞の映画とされるのは、人物たちを同一の場所、

同一の時刻に登場させることがあっても、それらのイマージュの間には微妙に食い違いがあり、整合性が欠落しているからである。つまり、映画のイマージュが＜時間イマージュ＞となるかどうかは、単に回想によって複数の過去が積み重ねられることにあるのではなく、それらが描きだす時間の領域（régions）に整合性がないことにかかっている。引用にある「相対性一般への到達（il accède à la relativité généralisée.）」と「過去の諸層間の決定不能性（*alternatives indécidables* entre nappes de passé）」といった表現は、それらの間に脈絡がないことを述べたものである。

では、『市民ケーン』が語るイマージュに破綻はあるのか。映画はケーンの過去を年代順に語っている。もちろん、ケーンの教育を担当した銀行家の回顧録が語るケーンは、ケーンの友人リーランドが語るケーンとも、愛人だったスーザンが語るケーンとも異なる。しかし、これは彼らの記憶違い、彼らの回想が感情に彩られているからではないのか。ドゥルーズは立場や関係の相違が「時間」を意味するとでも言いたいのだろうか。

『市民ケーン』は一見ケーンの人生を年代順に語っているようにみえるが、そこには重複があり、語り手ごとにケーンの人物像は食い違いを見せる。そして、映画は最後に「ローズ・バッド」の解答を与えるとはいえ、ついにケーンの統一像を示すことはない。映画『市民ケーン』は複数の異なった過去を共存させながら、それらに決して統一を与えることはない[2]。この点にこそ『市民ケーン』の時間性は、求められるべきであろう。つまり、複数の過去が共存していること自体が、対立と矛盾をフィルムにもたらし、『市民ケーン』を＜時間イマージュ＞の映画としているのだ。

3．第二の＜時間イマージュ＞

ところで、複数の過去が共存するということは、視点を過去に移せば、複数の現在が同時存在することになる。ドゥルーズは、それをアウグスチヌスを援用して説明する[3]。

> 聖アウグスチヌスの素晴らしい表現に従えば、未来の現在があり、現在の現在があり、過去の現在がある。三者とも出来事に含まれ、巻き付けられている。だから、それらは同時であり、説明できるものではない。（p.132）

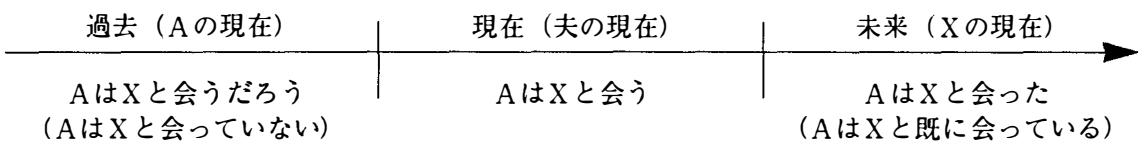
2）*Ibid.*, pp.138-139.

3）たとえば、『告白』には、次のような文章が見られる。

「もしも未来と過去とが存在するなら、それらがどこに存在するかをわたしは知りたいと思う。それらがどこに存在するかを知ることができなくても、しかもわたしはどこに存在しようと、それはそこにおいて未来または過去であるのではなく、現在であるということを知っている。それらは、もしもそこにおいても未来であるなら、まだそこに存在しないのであり、またもしもそこにおいても過去であるなら、もはや存在しないからである。それゆえ、存在するすべてのものは、どこに存在しようとも、ただ現在としてのみ存在する。」

（聖アウグスチヌス『告白』服部英次郎訳、岩波文庫・下巻、1976年、pp.119-120）

これは、どういうことなのか。ドゥルーズに従って、レネの『去年マリエンバートで』を例にとろう。この作品は、Aという女性とその夫、そしてXという男性の三人の人物を中心に物語が展開する。映画の中で、XはAに会ったと言うが、AはXのことを知らない。どちらが嘘をついているのか。ドゥルーズは、AもXも正しいと言う。彼らの主張が食い違うのは、彼らの属している時間が違うからだとされる。つまり、Xは「自分がAと既に知り合った」という未来の「現在」を生きているのに対し、Aは「Xとこれから知り合うことになる」という過去の「現在」を生きているのだとされる。そして、そこには当然のことながら「今、二人が出会っている」現在の「現在」を生きる夫の存在がある[4]。わかりにくい議論なので図にしてみよう。



『去年マリエンバートで』はこれら三つ（三人）の現在を同一のイマージュに収めており、この点にこそ第二の＜時間イマージュ＞の特質がある。すなわち、第二の＜時間イマージュ＞とは、「過去の現在」「現在の現在」「未来の現在」を同一空間内に提示するイマージュなのである。

> この第二の時間イマージュを、私達はロブ＝グリエの中に、一種のアウグスチヌス主義の中に見出す。ロブ＝グリエにおいては、現在が順番に過ぎ去ることは決してない。その代わりに、過去の現在、現在の現在、未来の現在の同時性が存在し、それらは恐るべき説明不能の時間を表現している。(p.133)

では、このような、過去の存続を前提とした、複数の現在が共存する「時間」などというものはあるのだろうか。これは、直線的な時間を基本とする古典物理が想定した「時間」とは全く異なるものである。古典科学の世界では、ある現象はそれ以前の過去の出来事の結果起こることであり、その次に起こることは現在の結果として起こることとされる。そして、これらの現象は全て直線上の点として順番に並べることが可能であった。こうした古典的な時間概念に反する「時間」は、一体どこから来たのであろう。『シネマ』の時間論は、ベルクソンの「持続としての時間」[5]をベースとしているのだから、＜時間イマージュ＞の「時間」とは、単に人の記憶と意識がもつ時間性にしか過ぎないのではないか。

4）Deleuze, *op.cit.*, p.133.
5）周知のとおり『シネマ』二巻の映画論は、ベルクソンの『物質と記憶』(Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, 1896) における知覚と記憶の理論を下敷きとしている。

4．<時間イマージュ>と量子力学

ドゥルーズは、確かにベルクソンは、当初、持続を我々の内部にあるもの、すなわち自我としての意識（＝主体）に属するものだとしたが、徐々にその考え方を逆転させることになったと言う[6]。彼はベルクソンに代わって次のように述べる。

> 唯一の主体性が時間なのだ。時間はその創出の段階から順番をもたない。だから、我々が時間に内属しているのであって、その逆ではない。(p.110)

この主張に従うなら、持続が我々の内部にあるのではなく、我々が持続の中にあるのだということになる。つまり、持続としての時間こそが実在の時間だとされる。はたして、このようなことがあり得るのか。ドゥルーズは、これに答えるかのように、ロブ＝グリエの映画が相対論的で複数宇宙論的だという。

> それ［ロブ＝グリエの映画世界の時間］は恒星の時間であり、**相対性**の系であろう。そこでは、人物は人間というよりは惑星のようであり［映画を支配する］調子は主観的であるよりは天文学的である。その中では、複数の世界が宇宙を構成しているのだ。**複数宇宙論**においては、いろいろな世界が存在するだけではなく、ただ一つの同じ出来事が、異なる世界で共役不可能な形で演じられるのである。(p.134、［　］、強調、及び下線は筆者)

この引用にある「宇宙を構成する複数の世界」、及び「複数宇宙論」という表現は、量子力学にいう「多世界解釈（many-worlds interpretation, 1957年）」に対応する。「多世界解釈」とは、電子・光子といった微小粒子の世界において、粒子が固体性と波動性という二つの性質を示すために、電子の位置が確率的にしか決まらず、全ての位置における電子の実在を肯定する考え方である。これを『去年マリエンバートで』の世界に当てはめるなら、「AがXに会った世界（Xの現在）」が「AがXに会わなかった世界（Aの現在）」と同時存在することは至極当然のこととなる。

しかし、「多世界解釈」の世界を構成する複数の世界は、基本的に干渉し合うことはない[7]。それらは互いに独立して存在するとされる。だから、「Aに会ったX」と「Xに会わなかったA」が同一空間内に共存する『去年マリエンバートで』の

6）Deleuze, *op.cit.*, p.110.

7）和田純夫は多世界解釈を構成する世界の関係に言及した文章の中で、次のように述べている。

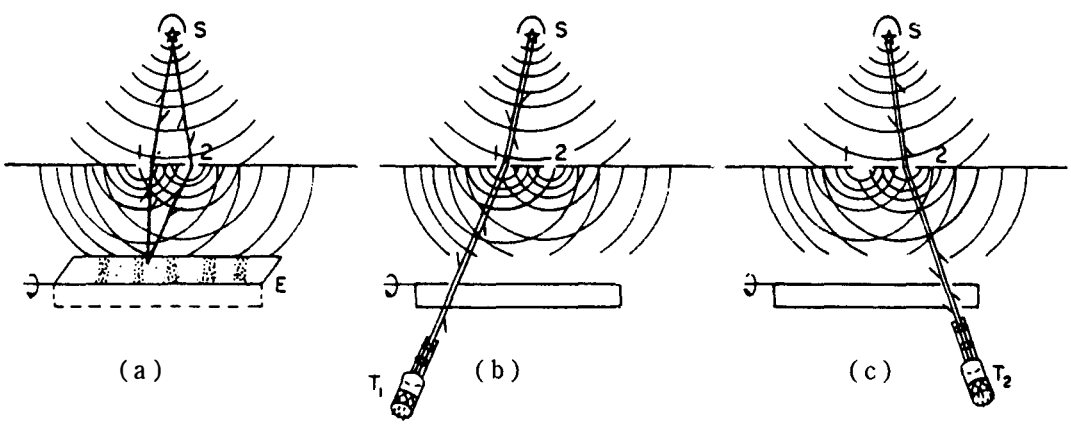
「右のドアを通ってきたという歴史をもつ世界と、左のドアを通ってきたという歴史をもつ世界は、確かに共存はしている。しかしそれはまったく異なった世界であり、共存度もそれぞれ独立に計算すべきものである。干渉などありえないし、二つの過去をもっている単一の状態をつくることなど絶対に不可能なのである。」

（和田純夫『量子力学が語る世界像』、講談社ブルーバックス、1994年、p.139）

「時間」は、「多世界解釈」の「時間」とは厳密には異なるものであろう。では、過去が現在と共存し、さらにそこに未来の存在さえをも想定しうるようなことが、実在の世界において起こり得るのか。

5．ホイーラーの遅延選択実験と量子の時間

この問いには、量子力学の世界における近年の実験結果が答えてくれる。「ホイーラーの遅延選択実験」(Wheeler's delayed-choice experiment、1978年）として知られる思考実験は、1980年代中葉にその事実が確認され[8]、光源Sから放出された光子が、事後の選択によって過去を決定することが知られている。図（a, b, c）[9]に示されているように、光子は二つの穴（1, 2）の開いたスリットを通過する場合、スリットの向こうにスクリーンEが立てられている時は、波として両方の穴を通過するが（図a)、スクリーンがない場合は、粒子としてスクリーンの後ろに置かれた検出器（T_1かT_2）に届く（図b, c)。



ホイーラーの遅延選択実験

これだけのことなら、光子が粒子性と波動性という二つの性質を示すという量子力学の常識を述べたにとどまるが、この実験の驚くべき点は、スクリーンを立てるか否かの決定が、光子のスリット通過後に決められることにある。つまり、光子が波としてスリットを通過したか、粒子として通過したかという過去の出来事がスリットを立てるか否かという未来の決断に左右されるのである。まさに結果（未来）が原因（過去）に先立っているのである。

この現象をアメリカの物理学者ジョン・G. クレーマー（John G. Cramer）は、放出体（emitter）と吸収体（absorber）という概念を用いて説明する[10]。すなわち、

8）フレッド・A・ウルフの『もう一つの宇宙』（遠山峻征・大西央士訳、講談社ブルーバックス、1995年）には、この実験結果への簡単な言及がある（pp.305-306)。

9）John G. Cramer, « The transactional interpretation of quantum mechanics », in *Reviews of Modern Physics*, volume 58, No.3, july, 1986, p.672.

10）*Ibid.*, p.661.

放出体（＝光源）は、スリットの通過以前に吸収体（＝スクリーン、又は検出器）に過去から未来へと提供波（offer wave）を送り、それを受け取った吸収体は、提供波の軌跡を通して未来から過去へと、スクリーンの有無を知らせる確認波（confirmation wave）を送るというのだ[11]。だから、光子はスリットの通過以前に、スクリーンの有無を知っているとされる。クレーマーによれば、こうした交流は時空を越えて瞬時に行われ、全ては「非時間的な各＜段階＞の重ね合わせ[12]」として生じるという。このように過去（光子の形態）が未来の選択（スクリーンの有無）によって決定されるのであれば、同じことが過去と現在、現在と未来の関係についても言えるであろう。

この実験に現れた時間こそ、我々が先に第二の＜時間イマージュ＞に見た時間の姿ではないか。もちろん、微小粒子の世界における時間をそのまま実在の時間に適用するには幾つかの留保が必要だろう。しかし、現代の最先端の科学が発見しつつある時間は、ドゥルーズがこれまでの二つの＜時間イマージュ＞に前提した時間と驚くほど近い。そして、実在の時間と意識（＝記憶[13]）の時間の類似は、これに止まらない。

6．意識の世界＝実在の世界

イギリスの数理物理学者、ロジャー・ペンローズは、並列コンピュータ[14]による人工知能の可能性を論じた文章の中で、次のように述べている。

> 意識のこの「唯一性」と量子的並行論との間には何らかの関係が考えられるように私には思える。量子論によれば、量子レヴェルでは異なる選択肢が線型重ね合わせの中に共存することが許されている。単一の量子状態は、このように原理的には、すべてが同時に生起している多数の異なる活動で構成されている。[...] 意識ある「心的状態」がなんらかの仕方で量子状態に近しいものであれば、思考の何らかの形の「唯一性」あるいは大局性の方が通常の並列コンピュータよりも適切であるように思われるだろう[15]。

11）詳しくは、ジョン・グリビン著『シュレディンガーの子猫たち』（櫻山義夫訳、シュプリンガー・フェアラーク東京株式会社、1998年）の最終章（「エピローグ」）、参照。特に、pp.323-340。原書は1995年刊行。

12）Cramer, *art. cit.*, p.661.

13）ドゥルーズによれば、ベルクソンの哲学において意識と記憶は、持続を仲介として等号で結ばれる。『ベルクソンの哲学』第三章の冒頭には次の文章がみられる。
« La durée est essentiellement mémoire, conscience, liberté. Et elle est conscience et liberté, parce qu'elle est d'abord mémoire. »（Gilles Deleuze, *Le Bergsonisme*, PUF, 1966, p.45）

14）並列コンピュータとは、「多数の別々な計算を独立に遂行し、かなり自立的なこれらの演算の結果が断続的に寄せ集められて相対的な計算に寄与する」型のコンピュータのことである。（ロジャー・ペンローズ『皇帝の新しい心』林一訳、みすず書房、1994年、p.448）

15）ペンローズ、前掲書、p.449。下線は筆者。

ペンローズはここで、量子的実在が複数の量子状態を足し合わせることによって得られることと、人間の「心的状態」が複数の意識の共存からなることに共通点を見出そうとしている。量子の単一性と意識の「唯一性」を同一視することは、現在のところ仮説の域を出ないが、量子力学の提示する時間の姿が、ベルクソンの言う「持続としての時間」に近い以上、我々は＜時間イマージュ＞の「時間」とは、実在の時間としての＜意識＝記憶の時間＞なのだと言えるのではないか。だからこそ、ドゥルーズは『シネマ・2』第五章の冒頭で、次のように書いていたのだ。

> 記憶が我々の中にあるのではない、「存在」としての記憶、世界としての記憶の中で生きているのは、私達の方なのだ。(pp.129-130)

従って、＜時間イマージュ＞の「時間」とは、現代の量子論が要請する時間の姿を知るなら、まさにそれが記憶と意識の時間性をおびているが故に、実在の「時間」そのものなのである。

この結論は、第三の＜時間イマージュ＞の「時間」とも密接に関連している。生成（devenir）の中に現れる第三の＜イマージュ＞[16]は、上にみた「実在の時間」の本性をまぎれもなく孕んでいる。しかし、その検討は次の機会にゆずらねばならない。次稿では、「諸力の系＝セリー（série de puissances)」としての＜イマージュ＞と「相乗作用（potentialisation)」としての＜イマージュ＞が、「時間」といかなる関係にあるのかを検討する。

（関西学院大学非常勤講師）

16）Deleuze, *op.cit.*, p.360.